大切であろうと思う。視野の狭い所から生まれた思想は全く危険である。

次に之等海事関係の事務所相互に、横の連絡があまりないままに施行されているということである。ほんのちょっとのぜいたに過ぎぬ世界に、軽率な判断だと戒めているが、率直にそう思った。考えてみると何もこの世界に始ったことではない。かりに教育界に見ても、小、中、高、大学の一貫性や、社会教育との横の連絡もあまり見られないではないかと自問する。現代社会が他の世界を理解できず、ただ己の権利を主張しすぎて暴走している と私は見るが、こんなことが敏感に響くのであろう。

又こんな地味な仕事に対して、極めて人員不足を来たしていることが感ぜられた。とりわけ船員や自衛隊員の不足には、深刻なものがあるようであった。それがどこから来たか、どうすれば解決するか、私には分らないことが多い。けれども一歩つっこんでみると政治の問題に突き当ることはまちがいなきそうである。

社会科の教師である私は、この節の海事官庁関係の各資料をもとにして、私の担当するクラスで、一時間ダリプリとって授業に扱った。郷土の生きる「社会」とは何かの一端を知らしむるためによい材料であると判断したから試みたのである。

（この項終り）

研究

尺間神社由来記

賛助会員　高橋　智
（南海部郡本匠村大字三股）

私は毎年正月三ヶ日のいづれかの日に、早朝尺間（しゃくまさん）神社に参拝のため登山することにしている。これは戦時中武運長久の祈願をこめたことを思い起し、今日まで命ながらえていることの神恩に対する感謝の意味からでもある。

今年は正月二日の日に頂上で日の出を拝するため登山したが、暁雲を金色にそめて登る旭日を仰ぐ気持は、何とも云えない。

東海日出でて波打つところ
国あり日本、我等が祖国　（昔の小学校の歌）

天地正大の気　粋然として神州に集まる（正気の歌）

これらの歌の如く、粛然として天地の霊気を感ずる思いがする。

「佐伯で高いは尺間山」といわれ、霊験あらたかな高神様として、昔から郷土の人々の信仰のまとになっているが、この神様のいわれについては、あまりと知られていないのではないかと思い、そのいわれについて記してみたい。

この神は山城の国愛宕山に祭られている愛宕神社の神で、御神体は日本の神代の時代に出てくる軻遇突（かぐつち）の命とその御子孫である武甕槌（たけみかづち）の命、経津主（ふつぬし）の命の三柱である。この神のいわれは、古事記の中に詳しく出ているので、そのおらましを記してみると、軻遇突の命は火を司どる神といわれ、伊邪那美の命が軻遇突の命をお産みになった時に、ミホトを焼かれて病みふし、とうとうお亡くなりになり、伊邪那岐の命はいたくかなしまれ、黄泉（よみ）の国に伊邪那美の命を尋ねて行かれたとあり、釜土の神としてまつられ、又荒神様ともいわれ火伏の神としても尊ばれている。

武甕槌の命は鹿島神宮に、経津主の命は香取神宮に祭られ、共に武勇の神として尊ばれている。このお二方の

神は、天照大神と高木の神の命をかしこみ出雲の国に行き、大国主の命とその御子の神々に、日嗣の御子の子孫に国を譲られるようにと交渉し、その結果幾わずして出雲の国の譲り渡しに成功し、かくて国中津々浦々まで見巡りて、邪神悪神を悉く斬り鎮めて、豊葦原のみずほの国の基礎を固められたといわれている。

この神が尺間山頂に勧請されたのは、今から凡そ千二百五十三年前、西暦紀元七百十七年の昔養老元年六月二十四日と伝えられている。何れの神社もそうであったように、昔は神仏合体であったために、神は仏の顕現されたものであるという本地垂迹説によって、永い間信仰された歴史をもっているが、このことは『古尺間経』によると、次の通りである。

柳も尺間山愛宕将軍地蔵大菩薩十二八天狗と申し奉れば、本地は十一面観世音菩薩、本動体はお薬師如来、形は普賢文殊と纏れ給ふ。世上に頑蒙を開かせ給はんが為、養老元年六月二十四日、天竺龍海山より この朝に天降らせ坐す。さればその日の御装束は一ぱ肌には蜀紅と申す錦の御直垂を御召し御身には黄金の鎧、頭には八葉銅と申す兜を戴き、御足には九万鐐と申す鐵の靴を踏み、左の御手には真文と申す鉆鷹の印を結ばせ給ひ、右の御手には錫丈の杖を突かせ給ふ。三万六千の大天狗小天狗を召しつれ、日本国中山々嶽々深山深谷、名ある天狗の住家を探せば、吾住む所は山城の国愛宕の郡、京陽法師の御弟子なり。日隠太郎坊とは身がことなり。されば神には父あり、仏には母ありといえども、吾には元より父もなく母もなく、生れ始まるところもなく死すべき終りもなし。霧雲霞の立迷ふ所を吾住家として、或時山頭に身を泛べ大海に火焔を立て、胸に金鋼霊、錫杖の音絶えざれば、常に吹き来る風は百八煩悩の眠を醒し就て天狗の力をもつて八万有余の力、夕岳の外、朝の御霧、夕べの霞を吹掃はんが為に鞍馬に帰り、後の御山に戻り、大峰を始めとして比叡山白石坊正龍ヶ岳那智の岳、飛騨の石山由布が岳、筑紫に海門冠が岳、日本国中取廻らん事疑視が間の遊覧也。風は立つ木の葉の影も残りなく向う悪魔を吹掃ひ、験裏達坊正達坊、天南坊三密坊、金比羅坊と敬って回す。

尚この山には、不動明王もまつられている。

このお経でおもしろいのは、三万六千の大天狗小天狗が出ていることである。この天狗のいわれは中国より日本に伝わり、日本では猿田彦の命の眷族ともいわれ、山伏姿に羽根をはやしていることになっている。山伏は山嶽仏教の行者で、いずれも天台宗、真言宗の密教に属しているところより、天狗も想像上のものであっても、何か仏教と関係がありそうである。

朝夕に人皆仰げ豊の国の
尺間の神のたけき御稜威を

大神朝臣 惟敏謹詠

と古記録にあり、佐伯氏一族の尺間信仰の厚かったことがうかがわれる。

（おわり）

（附）

佐伯史談会は、今年の初歩きに高橋氏の登られた次の日、一月三日に尺間山に登った。寒い暖かい日で老あり若あり、男女十八名打ち連れて、床木側から四百段を経て山頂の神社にまいり、社前の食堂でたのしく昼食、金鳳元見に尺南側に下り、若干の見学をしてバスで帰った。紙面繁雑なく詳細な記録は省略する。（羽柴）